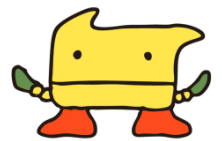


嬉望

第2号
平成27年5月29日
兵庫教育大学
教職大学院
学校経営コース
大学院生編集部

「嬉望」は、本学加東キャンパスが嬉野台地区にあることと、「希望」とをかけた造語です。



ひょうちゃん

大学マスコット

専門的な学びの時間

本年度も早いもので、既に2か月が過ぎました。

専門的な授業と多くの課題。そして、昨年度と比べて自由に使える時間など、全く違う環境に、戸惑いを隠せなかった一年生も、だんだんと「大学院生」としての生活に慣れ、自分なりの学びのリズムを確立しつつあります。

二年生も、各自の研究テーマを持ち、さらに増えた制約のない時間を、例えば、図書館にこもって様々な論文の研究をする院生や、フィールドワークに積極的に参加する院生、さらに現任校に足繁く通い、インタビューシツプに向けての準備に余念がない院生等、それぞれの時間を有効に活用しています。本号では、そんな院生たちの様子をお伝えします。

「課題研究」始まる

課題研究とは、2年間を通じて行われる学校や教育行政の事例研究を中心とした学校経営コースの中核をなす科目です。

一年生、二年生が一緒に机を並べ、共に学び、意見を交わ流できる機会でもあります。一年生にとっての最初の大きな課題は「事例研究」です。

●一年生の「事例研究」

氏名	対象事例
旭 遼介	・広島県立福山誠之館高等学校
伊林 淳弥	・広島県立西条農業高等学校
岩本 義裕	・大阪府立松原高等学校
植田 周	・兵庫県小野市立小野中学校
佐伯 秀介	・広島県立加計高等学校
摺石 敏之	・静岡県富士市立高等学校
田邊 勝彦	・兵庫県赤穂市立塩屋小学校
錦織 靖恵	・福井県立若狭高等学校
星野 朋啓	・奈良県御所市立葛城小学校 ・兵庫県姫路市教育委員会
三浦 泰子	・京都市立堀川高等学校
山根 昌浩	・島根県松江市立小中一貫校 (八束学園及びしまね潮風学園) ・福井県教育委員会
吉岡 真二	・品川区立小中一貫校日野学園
吉田 朝頭	・京都市立高倉小学校

5/1、5/8、5/15、5/16の4日間。各日、3~4名の発表でした。日を変えて、2事例発表した院生もいます。

これは、現二年生が、昨年度の後期に、全国各地の先進的な学校や教育行政の取組を調査研究し、レポートとしてまとめた「先進事例分析」について、一年生が新しい視点で、再分析するというものです。

再分析する対象事例が決まったら、一年生は、その事例をレポートした二年生から話を聞き、ホームページ等で新しい情報を集めるなどし、最終的に、自分なりの視点で分析したものをプレゼン方式で発表します。

この「事例研究」のプレゼン発表が5月1日~16日にかけて4回行われました。

事例校の概要や、先進的な取組の状況をおさえ、その取組が、なぜ成果を上げたのか、その成功要因について分析します。

既に一定の分析がなされているレポートに対し、新しい視点で再分析を行うことは、なかなか難しいことではあります。

13名の一年生は、新しいデータとの比較を行ったり、先輩の分析をクリティカルにとらえ、それとは違う自分なりの分析を提案したりと、それぞれの切り口で事例を読み取り、現任校（現任教員委員会）への示唆という形でまとめていきました。

最終日の16日（土）は、大学の公開授業日でもあり、夜間コースで学んでいる同じ学校経営コースの仲間である細嶋昌大さんと、伊田義信さんも参加しました。

現校長であるお二人から、今までのキャリアの中で得られた知見からのアドバイス等も頂き、この日はいつも以上に、活発な質疑応答の時間となりました。

Topix

5月1日の第1回「事例研究」発表に、読売新聞が取材に来ました。



読売新聞では「教育ルネサンス」のコーナーで、「教職大学院」のコラムを連載しています。この日の発表者であった吉田朝頭教諭のインタビュー記事が、5月16日に掲載されました。「課題研究」の内容も紹介されています。

一年生からは「時間配分を意識して発表する難しさを感じました。」「現場教員の立場ではHow、Whatの視点でしかとらえられていなかったことを、Whyで考える視点を持つことができ、新鮮でした。」等の感想が聞かれました。



「姫路市教育委員会」の事例についての分析を発表する一年生の星野朋啓教頭

(嬉望編集部特別企画)

加治佐学長との座談会

5月20日(水)

本年度の企画第一弾として、本学学長であり、学校経営コースの元コース長でもあられる加治佐哲也学長と、コース院生との座談会を、学長室にて行いました。

ここで学ぶ意義について、多くの示唆をいただきました。

・コーディネーター

コース長 浅野良一教授

・参加院生(4名)

岩瀬弘憲(佐賀県唐津市)

佐藤秀樹(鳥取県東郷町立芝原)

白川正樹(兵庫県有馬郡)

四田ちさと(山形県立山形)

以下、座談会の様子を、お送りします。

●一年間を振り返って

浅野

この一年間を振り返って、どのような学びを経て、何が変化がありましたか。

岩瀬

これまでマネジメントについてあまり意識したことはありませんでした。学校評価や個人の評価育成システムなど、

やらさ感ばかりでしたが、それが一連のつながった取り組みだと理解することができ、有用性に気づきました。

白川

以前から、兵庫教育大学で学びたいと思っていました。これまでは現場一筋でしたが、理論に基づいた最新の学びをする中で、広い視野に立つて考えることができるようになりまし。各地にフィールドワークに行ったり、本を読んだりしたこと、様々な地域から来た現職の先生方との触れあいなど、特に他校種の先生との交流が貴重でした。

四田

大学院では自由な時間が多く、できるだけ本を読むようにしています。最近、読んでいる内容と、学びがつながるようになりまし。また、学校訪問により実際の様子を把握することができ、本で読んだ内容だけではなく、肌で感じることもできたことも大きかったと思います。

佐藤

これまで自分が実践畑に立っていたことを痛感しました。今までは経験だけで進んできましたが、理論と実践とのつ

ながりを理解することができた一年でした。また、人的なつながり、ミクロとマクロの視点など、自分の見方を柔軟に変えて考えることができるようになりまし。

学長

皆さんの答えは、いいと思います。学ぶ意欲や管理職への高い意識を持つている人は、いろんなことに気づいていきます。それは漠然とした気持ちでは気付かないことです。そういう人は大学院で2年間過ごしても変化しないでしょう。

修士課程との違いもありまし。修士は学びの選択があり、そして修士論文を書くことが目標となります。

教職大学院は専門職を育てるものなので、付けて欲しい力が明確になっていま。養成する人材像がはっきりしているために、つまみ食い(選択)は許されませ。それに對して学びの自由度が無いと感じる人もいるでしょうが、他にする時間があるのなら、その道を極めて欲しいと思いま。



●管理職としての覚悟

浅野

管理職に向けての気持ちはどうですか。

岩瀬

現時点では大学院での実践的な学びの方に関心があり、追求したいと考えていま。マネジメントやカリキュラムの立場から現場を見る力量をもっと高めたいと思いま。

四田

大学院で学べば学ばほど、管理職の仕事の難しさや大変さを意識しま。将来の管理職としての覚悟を、今の時点で十分に持てているとは言えませが、この2年間の経験を自信に変えて、前向きに考えていま。

佐藤

私も、管理職試験を受けた時には管理職への覚悟が十分でなく、自分がマネジメントできるのか疑問でした。しかし、大学院でマネジメントについてや、行政とのつながりや国からの流れなどについて学びながら自己変容を促しているところだ。

白川

前任校で校長先生に声をかけていたたくまでは、管理職になることについて考えたことがありませでした。兵教大へ来て、本を読んだり、講義を受けたりする中で自分の

引き出しが増え、将来の管理職として自覚と意欲がさらに高まりました。大学院での学びを通して、管理職として何が必要か理解を深めるチャンスが与えられたことに感謝していま。

学長

仕事人生をどのように考えるかであると思いま。ここでの学びを通して、意欲が高まる人もいれば、逆に抵抗が大きくなる人もいるでしょう。学ぶことでキャリアが広がることもありまし。ここへ来ることで考え方や可能性が広がることは大きいと思いま。

●学び続ける教師とは

浅野

「学び続ける」ということについて、大学院に来て、どう思いましたか。

岩瀬

現場では日々の業務に追われて、学び続けることは非常に難しかったと思いま。でも、何かしなくてはと大学の先生の研究会に月一度参加していま。だから大学院で学ぶ機会ができたことはよかったですと思いま。これまでは教科の研究が中心でしたが、それ以外の学びにも興味を持ち、新しい視点を持つことができました。学びつづけるための方法を得たことも大きいです。

白川 私は英語教員なので現場では英語の勉強が中心でした。管理職試験で勉強した学校経営などに興味を持ち、もともと学び深めたいと思っていました。大学院で専門的に学ぶことができる日々はとても充実しています。修了後もずっと学び続けていきたいと思っています。

四田 今は十分に学べる恵まれた環境にあります。大学院を修了した後、学び続けるにはどうしたらいいのか不安です。現場に出てからも学んでいくような素地を作っておきたいです。

佐藤 まず元気であることが基本で、環境に応じて変わっていくことの大切さを痛感しています。こちらに来るときに、管理職の方から、教科をリードするのは管理職とは違うと言われ、発奮しました。これまで教科の様々なジャンルに取り組んできましたが、大学院ではマネジメントの解釈や外部の人とのつながり方など、管理職として必要なことなど、いろいろな気付きがあります。

学長 残りの職業人生は人によって長さは違いますが、自分の成長や学びは終わりではなくまだ変わっていく、そのためには新しいものを取り入れて

環境に適応していく、そのような気持ちを持たなくてはなりません。これを確立することが本学に来る大きな意味を持ちます。

もう一つは、皆さん本をたくさん読んでいると思います。いい意味での本の読み癖があり、勉強の仕方が分かっていることが大切です。

しかし、管理職になると非常に忙しい。本を読むとかどこかに行つて勉強してくるとかそういうことだけが学びではなく、日々経験していることが学びであると思えるかということも大切です。

また、ピンチになったとき、必死になつて対応すると思えますが、それもものすごい学びになります。そのように、すべてのことが学びなんだと思えば必ずプラスになります。

●これからの管理職

浅野 今後の管理職像や管理職育成についてはどうでしょうか。

学長 東京都では管理職のなり手が少なく足りない状況です。それは今までの管理職が魅力



を發揮していないからです。生き生きしていません。待遇も良くありません。だからなり手がいないのです。

これからは、魅力ある管理職、つまり管理職というのはおもしろくてやりがいがあり、その人からオーラが出ていて、そういう管理職になつて欲しいのです。それにつきます。

浅野 そのためには何が必要でしょうか。

学長 結局は人生をどう考えるかです。管理職は苦勞しますが、それが自分の人生で意味のあるものと思えるかどうか、それができなければきついでしよう。

浅野 そのためにコーホートを高めていくことが必要ではないでしょうか。

学長 コーホートの効果はいろいろあります。いい人材が揃うと、その集団からいろいろなことが学べます。刺激を受けますし、修了してからネットワークにより学び続けることができます。問題は密になるほど人間関係が固定化されてしまうことでしょうか。

浅野 最後に、学長に聞いてみたいことはありますか。

白川 今後教職大学院が全国に広がっていくと思えますが、兵教大も含め、どのようなふうにしていくのでしょうか。

学長 これからの教員養成は教職大学院が中心になります。そして、養成と採用と研修が一体化されていきます。今は教育委員会と大学が別ですが、兵教大は進んでいて、交流などをやっています。これがさらに進んでいくでしょう。

また、現場経験がなければ、大学教員に採用されなくなりません。兵教大では今でもその条件を付けています。

教育再生実行会議が出した答申に教員のキャリアパスについて出ています。それによりますと、これまで教員は、管理職を目指してキャリアが進んでいきましたが、それだけではなく、指導教諭や教職大学院の教員という道もあると書かれています。

また公務員と法人の職員を兼ねたクロスアポイントメント(混合給与)で両方とも常勤という制度が成立するかもしれない。そのためには教育公務員特例法を変えなくてははいけません。例えば教育委員会の指導主事と大学院の教員を兼ねるといふ職が生まれる可能性があります。

岩瀬 クロスアポイントメントと

いう制度は、大学と現場をつなぐ仕組みとして興味深いです。

●兵教大の今後

浅野 兵教大は全国の教職大学院の先鞭を切つて、やり方の変化に対応していく必要があります。

学長 兵教大は当面は教師教育のトップランナーとしてやっていきますが、他にない学校経営コースなど、地元の大学にないものを作っていきます。

佐藤 そういう意味で兵教大は進んでいることを入学して実感しました。修了したらそのような魅力をアピールしていきたいです。

学長 ところで大学受験の変化はどのようになっていますか。

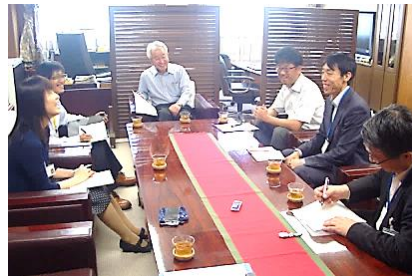
政権が変わらない限り、かなりの変革が起こるでしょう。学習指導要領が変わり、入試の仕方も変わるでしょう。今の大学生は頭はいいので



すが、主体性が足りません。もつと学ぼうという意欲のある人材が必要です。高校の進路指導は偏差値に頼りすぎているため、今のままでは大学が何をしても変わりません。

浅野 最後に学生の皆さんに一言お願いします。

学長 現場では即効性が求められます。改善プランがすぐに役立つことがあります。長く学び続けて活躍し、そして魅力ある管理職になっていただきたいです。



(写真左より) 四田さん、佐藤さん、加治佐学長、岩瀬さん、白川さん、浅野教授

今月のフィールドワーク

第1回塔南高校教師塾

5月21日(木)

京都市立塔南高等学校の教

師塾に学校経営コースの2年生の9名が参加してきました。この教師塾は、昨年度、兵庫教育大学の学校経営コースを修了した黒澤寛己教授が主宰者を務めています。4年前に前向きに頑張っている先生の「教師力」を総合的に向上させる場になることを狙って企画されました。

今年度第1回目となる今回は教師塾の基本的な考え方やそれぞれの教育理念を作る方法などを説明されました。実践報告では、教師塾のメンバーである20代前半の2人の教諭が、「学び合いの思想と方法」、「学び合いを生かした授業の取組について」と題して発表を行いました。発表の中では、若手2名が「学び合い」や「アクティブ・ラーニング」等についての自分自身の解釈や思考を堂々と発表しており、理想の教師に向かって直向きに取り組む姿に感銘を受けました。

また、当日は、大学教授、他校教職員、大学院生、教育委員会指導主事、教育関連企業の方々が集まり、様々な立場からの意見交流が行われました。終了時間になってからも、それぞれに意見交換を続けられており、集まった先生を元気にする会となりました。年間約10回の開催を計画しておられるそうです。

参加した院生からは、「若手の頑張る姿に、良い刺激を受けた」等のポジティブな感想があふれ、今回参加できなかった院生も、次回以降での参加を楽しみにしています。



参加者を前に熱く語る主催者の黒澤寛己教諭

附属中情報教育講演会

5月26日(火)

兵庫教育大学附属中学校にて、生徒・保護者を対象にした情報教育講演会が開催されました。学校経営コースから2年生5名が参加させていたいただきました。

講師はNIT情報技術推進ネットワーク株式会社嶋田重紀氏。「SNS投稿のリスクやトラブルについて」の演題で、講演されました。

今、子どもたちが直面している一番のネットリスクは「動画投稿」に関するものである。子どもたちだけでなく、大人にとってもそうである。一度投稿した動画は簡単に消えず、それが「守秘義務違反」「人権侵害」「プライバシー侵害」などの多くの問題を引き起こしている。多くの子どもたちが、スマ

ホやゲーム機を通じて、簡単にネットの世界につながる現代の環境の中では、「使わないこと」は決して安全ではなく、むしろ「使ってその危険を知ること」が大事である。禁止するのはなく、正しく使うことを教えるべきである。：といった、スマホなどについての新しい視点を得ることができました。

また、最新の情報機器がどれほど進化しているかを紹介され、いかに個人情報を守る必要が大切かということも教えていただきました。

学校現場で、教師として実際に子どもたちに指導するために、自分自身が最新の情報技術について、しっかりと勉強する必要があることを実感しました。

和歌山県教育庁「教職員評価に関する研修会」

5月28日(木)

和歌山県の管理職研修に、2年生6名が参加してきました。研修会は、教職員評価と勤務時間についての2本立てで構成され、そのうち教職員評価については、「教職員評価制度について」と題して本学浅野教授が講義を行いました。

和歌山県は南北に長い県であるため、紀北と紀南に分かれて研修を行っています。初

日は紀北対象で、北部の各小中高特別支援学校の管理職が集まりました。会場では、笑顔で挨拶を交わして会話をする姿が多々見られ、終始和やかな雰囲気の中で研修が進みました。講義では、評価制度の概要から、評価の考え方や具体的な評価の進め方を学び、演習を通して、目標設定や実際に行動を評価することの難しさを体験しながら学ぶことができました。昨年5月に地方公務員法の一部改正されましたが、それを受けて、人事評価をどのように考えればよいのかを学ぶことができました。

和歌山県では、「目標管理」のことを「目標申告」と言っており、自己統制のイメージが強いと感じました。目標を設定する際に指し手感覚で取り組むことができるように項目を確認するポイントや、行動を評価するときに留意することなど、参加者の皆さんは真剣に講義を聴き、演習に参加していました。グループの話し合いに院生も参加しましたが、活発な意見交流ができました。



これからの人事評価の在り方について話される浅野教授 (和歌山県では、現在、新しい評価制度を試行実施中です)